

県北 どらくろあ

第76号 2022年7月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑧ 内名駅

「起伏に富んだ車窓と 溪流のそばの秘境駅」

朝、目が覚めるとすぐに窓の外を見た。地域の天気予報では小雨になっていたが、曇天だが雨は降っていない。6月20日月曜日、6時過ぎに車で家を出た。芸備線の沿線の道路を走るのだが、一度歩いている場所なので、周囲の景色が気になってしまう。季節によって雰囲気違って見える。

7時前に小奴可駅に到着。窓口

業務を受託している道後タクシーの社員さんが待機している。早朝から大変だなと思っていたが、先月とは違う人なので、交代制なのだろう。7時3分発の新見行きに乗った。同乗者が一人、制服から東城高校の女子生徒だろうか。車内は二人だけだ。

動き出した列車はしばらくして、緑の山中に分け入った。竹林が目につく。太い孟宗竹ではなく、日本に古くからあるスリムな真竹である。さまざまな景観を車窓に映しながら、列車はゆるやかに下って行く。山林や田園地帯、蛇行する東城川の鉄橋を渡り、溪



駅の缶バッチを無料配布



近くを流れる東城川は溪流釣りの名所である。

流のほつりを走る。最後は長いトンネルを抜けて、さらに山林の緑のトンネルを出ると内名駅に到着する。山間の起伏に富んだ鉄道の旅が満喫できる区間である。

内名駅から女生徒が一人、乗車した。数は少ないが、今でも通学の貴重な交通機関であることに変わりはない。

内名駅は、昭和30年に最初から無人駅として開設された。昭和10年に開業した小奴可ー備後八幡間は距離が長くて起伏が激しいので、どちらの駅に出るにも不便な地域の住民の熱望で誕生した。このあたりの事情は、昭和27年開業の平子駅と似ている。

駅舎はなく、ホームに小さな待合室がある。カメラを構えてアングルを工夫していると、線路を横切る小さな影に気づいた。狸である。成獣にしてはまだ小さい。大きく撮ってやろうと近づいたら、線路脇の笹藪の中に姿を消した。

待合室のベンチに腰かけて、持参したコロッケパンでのおんぎり朝食。線路の向こう側には畑と農家があって、駅にいるという感覚はない。プラスチックケースの中に缶バッチと記念シートが入れられていて、「記念にお持ち帰りください



神社（写真上）がある。御祭神が須佐之男命（スサノオノミコト）で、日本神話においてスサノオが詠んだ和歌「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」が由来だろうか。地元では、疫病退散並びに牛馬の守護神として尊崇されていたようで、明治5年に雲神社から八雲神社に改称されている。コロナ禍の一日でも早い終息を祈願した。

拝殿横の大イチョウの御神木が雄々しく起立している。背景の山から流れ落ちる水音がコンクリの貯水槽の中で反響して、まるで水琴窟のような澄んだ音色が聞こえてくる。渓谷の中にある内名は、水が集まる里である。今年は空梅雨気味なので、棚田はたっぷり水を湛えている。

神社の前の県道450号線を少し歩くと、納屋の広い軒下に休憩処のようなスペースがあり、年輩の女性に声をかけてもらった。上田ヒフミさんで、手作りの丸太の椅子に腰かけて話を訊いた。10年以上、内名駅の掃除を日課にしているそうで、待合室の駅ノートや缶バッジ等も上田さんが管理している。

秘境駅として有名になったので、週末や休日には、かなりの旅行者が訪れるのだという。仲良くなった人もいて、再訪時にはわざわざ連絡してくれることもあるらしい。壁際には、案山子（写真下）として作ったという人形が微笑んでいる。

「これから小奴可駅まで歩いて帰るんです」と告げると、それは大変だと、缶コーヒーと栄養ドリンクを「お接待」していただいた。芸備線ストロールの初回に、「県北が散歩やウォーキングの盛んな土地になり、民間有志が自宅のトイレや休息所を提供する。四国霊場の『お接待』のような場所が増えれば」と書いたが、上田さんの休憩処はまさに理想的である。元気もいただいて、小奴可駅に向かって歩き始めた。田んぼの畔や沿道で、群生するヒメジオンの白い花が風に揺れている。今回の帰路は、東城川が蛇行しているので、線路沿いや川沿いの道をただ進むというわけにはいかない。道にも何度か迷ったが、それだけ起伏のある道程を楽しめた。

芸備線の沿線の地図で「笑田」という地名をみつけた。「わらうだ」とふりがながつけられている。その土地を訪問して地名の由来を確認したかったのだが、足の痛みで断念。

小奴可の水田地帯には、鉄穴（かんな）残丘と呼ばれる小山が所々残っている。砂鉄採取のために山を掘り尽くし最後に残った核の部分だ。水田には不向きだった土地の希望や、水田が出来たときの喜びを表しているのだろうか。「笑田」の由来をご存知の方がいれば、ご教示をお願いします。

参考文献：「芸備線・中国山地の沿線物語」（武田祐三著）

い。またのお越しを心よりお待ち申し上げております。田森自治振興区」の文字。ありがたく、一つづつ頂戴した。

缶バッジには列車が停まったホームの写真がデザインされていて、記念シートには内名駅の歴史や国指定の重要無形民俗文化財の「比婆荒神神楽」の解説が載せられている。裏面に押された赤青二種類のスタンプが、「押し鉄」（鉄道スタンプファン）には嬉しい。

ケースの中にはノートも入っていて、「秘境の駅内名・駅ノート」と書いてある。そう、内名駅は中国山地の山懐にある”秘境”の駅として、鉄

道ファンの間ではかなり有名であるらしい。ノートをめくると、遠方から内名駅を目指して旅して来た人の書き込みが目立つ。何度も来ている人がいるようだ。ボールペンや色鉛筆を使って、駅のホームや周辺の景色を描いている人もいる。

ホームから東城方面に道を下ると、東城川（二頁写真下）の橋に出る。ガードレールには「内名橋」、親柱には「成羽川」のプレート。岡山の高梁川に合流する一級河川で、広島県域では東城川と呼ばれている。内名橋周辺は、アユやアマゴが釣れる人気スポットとして知られている、らしい。

駅から五分ほどの所に、竹森八雲



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「47年目の帰郷」

小野卓司 著 講談社

終戦直後の昭和 21 年、岩手県盛岡駅で浮浪児の少年が保護された。児童養護施設に引き取られたが、自分の名前を含めて過去の記憶を一切喪失していた。その上、聴覚障害も併せ持っていた。少年は成長し、養母の名字をもらって阿部哲郎となり、妻子を持った。そして、福祉バンクで女性の職員に出会う。



不思議なことに、彼女の声だけは波長が合うのか、難聴の哲郎に聞き取れたのである。身の上を彼女に話しているうちに、自分の正体を知りたいという希求が強まり、記憶もいづらか甦る。周囲の助けで、自分の故郷にたどり着いた人物のルポルタージュ、小説よりもドラマチックだ！

「明日の色」

新野剛志 著 講談社

「元ホームレス作家ならではの人情物語」という帯の言葉。その経験が、物語にも生かされている。ホームレスに生活保護を受けさせ、そこから宿泊費や食費を徴収する「貧困ビジネス」、そうしたうさんくさい施設で働いている松橋吾郎が主人公だ。

吾郎は、入所者の槐多に絵の才能があることを知り、一攫千金を夢見てギャラリーを開設することを決意。事業に失敗して離婚、妻子を失った中年男が再起をはかる。素人のギャラリストはさまざまな壁にぶつかるが、周囲の“人情”に支えられながら、下町の小さなギャラリーを育てゆく。絵画ビジネスの内実も興味深い。



「岳」

石塚真一 著 小学館

どうして山に登るのだろうか。悲惨な遭難事故のニュースを見るたびにそう思う。捜索隊に多大な迷惑をかけ、家族を悲しませる。この漫画を読んで、その理由がわかったような気がする。

山岳救助の民間ボランティア、島崎三歩は住居もなく、日本アルプスの山中でテント暮らし。クライマーとして世界の高峰に挑んできた三歩は、その卓抜した技量と体力で、遭難者の救助に向かう。発見したときは、死者に対しても「良く頑張った」と声をかけ、生存者には「また来てね」と笑顔で手を振る。人生に迷い、疲れた時、山に癒されて救われた人が多くいる。山の魅力も満載、全 18 巻 158 話を集録。



「ぐんぐん伸びよう会」 (教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

人は、自分の人生を体験できるのは 1 度限り。

さまざまな内容の読書を通して、国内外の幅広い経験を味わってみましょう。

幼児の子守にテレビやスマートフォンを見せるのではなく、母国語であるひらがなを覚えさせて一人で絵本が読め、本が子守をしてくれるようになれば、どんなに楽でしょうか。

繰り返しながら言葉の世界を広げていき、視野の広い子に成長してほしいですね。

体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせください。

0~3 歳：4800 円 (週 1 回)。4 歳~小 6 生：算数・国語 (各 5500 円、週 2 回)。



「植物画とは何か」
—日本の植物図譜を中心に— (7)

6. 飯沼慾齋の「草木圖説」

岩崎常正（灌園）や川原慶賀とほぼ同じ時代に直接、植物を観察して植物画を描き、それをツェンペリーの「Flora Japonica」によって 19 綱に分類し、それぞれの植物については学名と和名をつけて作成した植物図譜「草木圖説」を完成させた人物に飯沼慾齋がいる。飯沼慾齋は 1782（天明 2）年 6 月 10 日、伊勢国鈴鹿郡亀山の西町（現在は三重県亀山市西町）で、西村守安の次男として生れた。慾齋は 1800（寛政 12）年ごろ、京都の典医福井榕亭の塾に入門して漢方を学び、大垣で漢方医として養父飯沼長頭を扶けていた。

1804（文化 1）年 7 月 21 日、小野蘭山は幕命により駿河・伊勢・津・美濃大垣・大井・信州三戸野・上松・下諏訪・軽井沢・上州板鼻・武州を経て、12 月 13 日に江戸へ帰り、「駿州勢州志州採葉記」1 巻をまとめ、幕府へ提出している。小野蘭山が美濃大垣に着いたのは 9 月 28 日、その夜は慾齋の養父である飯沼龍夫（長頭）の家に宿泊した。飯沼長頭は 1777（安永 6）年、京都に上り、5 年の間、福井楓亭に内科を、檜林由仙に外科を学んだ後、大垣に帰り、医を開業していたが、1795（寛政 7）年、再び京都へ上り、産科を賀川満郷、賀川満定に学び、本草を小野蘭山に学んでいることから、小野蘭山が大垣に到着した際、招聘したと考えられる。飯沼慾齋が京都で医学を学んでいたころは、小野蘭山は幕府の招聘に応じ、1798（寛政 10）年 10 月に江戸へ出ていたから、このとき、初めて小野蘭山に会ったと考えられる。養父が尊敬する小野蘭山、このとき、76 歳であった。

大垣へ蘭学が伝わったのは早く、蘭学を前野良沢に学んだ大垣の医師江馬蘭齋（1723～1838）に始まる。1809（文化 6）年頃、江馬蘭齋に蘭学を学んだ医師吉安三栄の話で飯沼慾齋はこれからは蘭学の時代だとさとり、蘭齋の門人吉川広簡について蘭書を読むことを学んだが、1810（文化 7）年、妻子を大垣に残して江戸へ出て宇田川玄信（棗齋、1769～1834）の門へ入った。そして、1811（文化 8）年、飯沼慾齋は蘭方医として開業し、繁昌する。そのかたわら蘭書を購入し、1822（文政 5）年ごろから自宅で、友人の医師吉安三栄や慾齋より 23 歳年下の江馬元益（活堂、1806～1891）らと蘭書の会読をしばしば行っていた。江馬活堂が水谷豊文（1779～1833）に本草を学んでいることを知り、それに刺激されて飯沼慾齋は次第に植物について関心・興味が強くなっていった。

1831 年（天保 2）年、50 歳になった飯沼慾齋は、家督を飯沼長榮（1824～1903）へ譲り、隠居し、そして 1844（弘化 1）年、「草木圖説」を著そうと決心して筆を執り、1852（嘉永 5）年 3 月に「草木圖説」前編草部 20 巻の原稿を書き上げている。「草木圖説」の刊行は 1856（安政 3）年に始まり、1862（文久 2）年 9 月、「草木圖説」前編草部全 20 巻の刊行が完了した。

図 1 のキクザキイチゲは、飯沼慾齋筆の「草木図説稿本」に収められているもので、図 2 は「増訂草木圖説草部」にあるキクザキイチゲである。両者を比べると、キクザキイチゲの全形は同じであるから、「草木図説稿本」によって版木が彫られ、出版されたことがわかる。

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。



図1 「草木図説稿本」のキクザキイチリンソウ
(八坂書房版による)

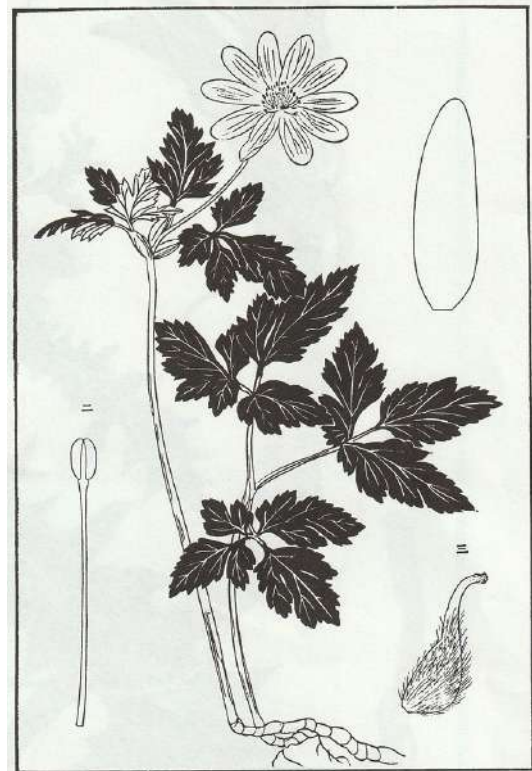


図2 キクザキイチゲ
(増訂草木圖説草部による)

「つれづれ歌談」25

松岡 初枝

食は大切なことのひとつです。食材の傷みや暑い夏はいろいろ工夫していた万葉びと。しかし、食べ物を詠んだ歌は少ないのです。

・瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして憊はゆ いづくより来たりしものそ まなかひに もとなかかりて安眠(やすい)しなさぬ

山上憶良

瓜を食べると子供を思う。栗を食べれば尚更のこと。どこからか面影がちらついて、なかなか眠れないんだよ。

有名な歌ですが、憶良は上級役人なので、赴任地の宴席で出される食材は当時の高級品が並びます。蓮の実入り飯・海産物の干物・



鴨入りの汁・蘇(チーズ)・酔の物・菓子(果実も含む)などの豪華な宴食ですが、当時の庶民は玄米飯・青菜の汁・たまに魚、あとは塩だけなので、歴然たる差があります。食べるだけいいさ、と思うと憶良達の食生活は恵まれていたと言えます。

・家にあれば筍(け)に盛る飯(い)を草枕旅にしあれば草の葉に盛る 有間皇子

前に紹介した結び松の歌と同時に詠まれた、護送中の悲しい食事の歌ですが、皇子の身分の最後の食は、常とは異いすぎて哀れです。

・枳(からたち)の棘原(うばら)刈り除(そ)け倉立てむ屎(くそ)遠くまれ櫛造る刀自(とじ)

忌部首(いむべのおびと)

枳のいばらを刈って倉を作るから、櫛づくりのおばさん、屎は遠くでしてくれよ。

刀自といえばまあまあ家の主婦「ちょっと首さん！」食べたら用を足すのは皆同じ。川があれば川、くみとり式もあり、藤原京にはきちんとした水洗トイレが川を利用して作られていたのです。清潔な日本の原点ですね。

「あそこの一番、上の棚が以前から気になってたんですが、ずいぶんとマニアックな本が並んでますね」

そう言って鍼灸師の周さんが、天井の方を指差した。

『新雑事秘辛―金子光晴対談集』、矢田挿雲の『江戸から東京へ』全六巻、カフカの『審判・アメリカ』、里見弴の『安城家の兄弟』……、確かに重量級だな」

山本さんは、隣の西城のお寺の和尚さんだ。二人とも大の愛猫家で、うちでドラマという猫を飼っていた時は、互いの飼猫自慢をしていたのだが、ドラマが病気で急死してからは、さすがに控えている。その代わりに、子猫の里親の話や保護猫の情報を持ち込むようになった。気持ちはありがたいが、ちゃんと面倒を見てやれなかったという負い目がまだ拭えていない。

「金子光晴、いいですね」

そう言って周さんは、バリトンの朗々とした声で、一編の詩を吟じた。

洗面器のなかの
さびしい音よ。

くれてゆく岬（タンジヨン）の
雨の淀泊（とまり）。

ゆれて、
傾いて、

疲れたところに
いつまでもはなれぬひびきよ。

人の生のつづくかぎり
耳よ。おぬしは聴くべし。

洗面器のなかの

お墓の本棚

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑦〇

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

音のさびしさを。

「確か、小便する女のことを書いたんだよな。おれはマジちゃんがオシッコをする姿は可愛くて大好きだけだな」

マジは山本さんが飼っている雌のペルシャ猫である。周さんが苦笑を浮かべた。周さんは、寅というキジトラの雄猫を飼っている。映画のフー

テンの寅さんの大ファンで、全作品を観ているという。猫の毛アレルギーに悩まされたり、マタタビ酒に酔った寅に鼻先を齧られても、寅さんの妹のさくらのように、変わらない愛情を注いでいる。

金子光晴の「洗面器」という詩には前書きがある。

僕は長年のあひだ、洗面器といふ

りとさびしい音を立てて尿をする。

「あそこは、本のお墓なんですよ」

「仏壇？」

僧侶の山本さんが目を剥いた。

「あの本は、常連客だった人の遺品なんです。以前に、本の雑誌におもしろいイラスト入りのコラムが載ってましてね。『お墓の中の本棚』、というタイトルです。一年に一度のお墓参りで、その一日だけそのお墓はパカッと開くようになっていて、故人の大好きだった蔵書が入っている。その中から、気になる本を一冊、持ち帰る。その代わりに、故人に天国で読んでもらいたい本を入れておく。家に帰って、本を読みながら、故人のことをしみじみと思いつく。その話をしたら、とても気に入ったらしくて、長居さん、墓に本棚が作れないかと、本当に石屋さんに相談したそうです」

「おいおい、嘘だろ……」

山本さんが疑いの目で睨んだ。実は、わたしも疑っている。洒落な人だったので、相手を喜ばすために話をいくぶん盛る傾向がある。

「雨が沁み込むので無理だと言われたそうです。それで、うちの店の棚



に目を付けたんですよ。あの一番上の棚に、自分の蔵書を置いてほしいと頼まれたんです」

「気持ちにはよくわかります。本が大好きだったんですね。確かにここは居心地がいい。わたしも、本に囲まれて安らかに瞑りたい……」

周さんの言葉に深く頷いた。

「供養代というのか、本の保管料もいただけるというのでね」

「金を取ってるのか？」

おいおい、あんたもお布施をも

らっているだろうが、と内心、ツツコミを入れた。

「そういう約束だったんですが、大事なことを忘れていました。亡くなった人からはお金はいただけない……」

「遺族がいるじゃねえか」

「長居さんは係累のいない人で、天涯孤独だったようです」

「じゃあ、墓を作っても仕方がないじゃねえか」

「そういうことです」

三人で棚の本を見上げた。山本さんは合掌して、小さく念仏を唱えた。そのとき、店の自動扉が開いた。Tシャツ姿の少年が入って来た。高校生なのだが、小柄で華奢な身体はもっと幼く見える。走って来たのか、大汗をかいて息を切らせている。

「あの本、まだありますか？」

「大丈夫だよ」

脚立を使って、最上段の棚から本を降ろした。矢田挿雲の「江戸から東京へ」全六巻だ。

「五百円おまけして五千円です」

会計をすませて、本の入った手提げの紙袋を大事そうに両手で抱えて出て行く背中に、「ありがとうございますました」と声をかけた。

「この野郎、どうということだ？ 何

が本の仏壇だ。位牌を売っちまったようなもんじゃねえか」

周さんも冷やかな目で睨んでいる。

「佐々木くん……、さっきの高校生ですが、おばあちゃんが佐伯泰英さんの大ファンで、将来は時代小説家になりたいんだそうです。どんな本を読んだらいいですかと相談されて、あの本を薦めたんです。長居さんが読んだ本の中で、三つの資料があれば時代小説を書くのは簡単だと、金子光晴が言っているんだそうです。その一つが、『江戸から東京へ』なんです」

「だからと言って……」

山本さんは不満顔だ。

「長居さんも、いつかは時代小説を書いてみたいと思っていた。だから、神田の古本屋街であの本を手に入れた。他の二つの資料が何かは聞いていませんが、値段が高くて手が出なかつたそうです」

空きの出た本棚を見上げた。

「本当にこの本が欲しいと思ってる人が来たら、売ってもかまわないと長居さんの承諾を得ています。本は……、読まれてこそ価値があるんです。その代わり、長居さんに読んでもらいたい本を入れておきます」

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

◇節分 立春の前日で二月三日、四日頃にあたる。節分はもともと季節の移り変わるとき、すなわち二十四節気の節気、立春・立夏・立秋・立冬の前日を指し、四季の分かれ目を意味し、大切な目安としてかならず暦注に記されていた。しかし、いつからか立春の前日だけが、暦に記載されるようになった。

一年で一番寒い頃、豊かな春を迎えようと新年に先立ち、旧い年の死を象徴する行事や、これまでの穢れを潔斎しようという習俗などが残されている。中国の太陰太陽暦では二千年来、立春の前後に新年を迎えるように決められていた。「立春正月」の思想である。つまり、大寒より十五日目、立春の前日が節分です。立春から春になるのだから、この日は一年の最後と言ってよい日で、邪気を祓い、幸運を願いさまざまな行事が行なわれた。

中国では節分(大晦日)に、「追儺(ついな)」「鬼遣(おにやらい)」という

邪鬼や疫病などを打ち払うため、鬼の面をかぶった人を、桃の木で作った弓矢で撃って追い払う行事があった。これは奈良時代に日本に伝わり、平安時代には毎年、大晦日に宮中で盛んに行なわれた行事である。これが次第に民間に伝わっていった。



年男が「福は内、鬼は外」と言って、煎った大豆をまく厄払い行事は、中国の明時代の風習で、これが日本に伝わり、定着したのは室町時代中期以降のことである。豆まきの後、自分の年の数だけ豆を拾って食べる風習は、年取りの行事の名残であった。食べることで、邪気を払い、病に勝つ力がつくと考えられていた。江戸時代に豆まき行事が一般庶民の間に広まったようである。

また、この日の夜、家の入口に鰯の頭を刺した柊(ひいらぎ)の枝を飾る風習がある。鬼は元来、臭気に弱く、柊、鰯、ニンニクなどは、いずれも燃やすものすごい臭いがするものばかりで、鬼が最も嫌うものとされている。地方によればネギ、毛髪などを刺している。

◇八十八夜 立春から数えて八十八日目で五月二日頃。この八十八夜も、土用、二百十日と同じように、立春から数えた日数をもって、季節的行事の日を示すもので、日本的でユニークな暦注である。二十四節気でも、これを細分化した七十二候でも、はっきり表現出来ない日本独自の気候現象に基いた暦注である。

八十八夜は立夏の三〜四日前、ちょうど種まきや田の苗代づくりや、茶

摘みの目安となったわけで、旧暦時代の八十八夜は農耕民族にとってきわめて重要な意味を持っていた。「おそ霜」が降りることを農家は恐れていたのだが、ちょうどこの頃に、最後の霜が降りることが多いのである。

「八十八夜の別れ霜」、また石川県では「八十八夜の針たけ」という言葉がある。「八十八夜の別れ霜」とは、この頃になるとようやく霜の被害から解放されるときで、種まきの目安になることを意味している。「八十八夜の針たけ」とは、この頃には稲の苗がちょうど縫い針の丈くらいの大さきになることをいう。

種まきと八十八夜が結びついたのは、「八十八」は漢字の「米」に通じ、末広がり「八」が重なる縁起の良さも加わって、昔から農事の目安として欠かせない日であった。このことから、おかゆを田の神に供え豊作祈願する重要な日とされた。

この時期は、茶摘み歌に歌われているように、茶摘みが最盛期の頃であり、この日に摘んだ茶の葉は上等等とされているし、味が良いだけでなく、長寿にも効果があるとされている。農事ばかりでなく、瀬戸内海では「魚島時」と言われ、この日は豊漁期に入る目安とされていた。

海外旅行ツアー「コンダクター・エピソード」⑧

ロシア編・「共産主義崩壊後の ロシア国内の現実」

山崎 允まこと

私たちの船142299トン（にっぽん丸は22472トン）は今、ロシアのサンクトペテルブルク（昔の

レニングラード）港に停泊していて軍楽隊による歓迎の演奏を待っているところだ。18階層の超メガトン級バミューダ船籍「バルト海クルーズ」用の「ロイヤルプリンセス号」を迎えるセレモニーが始まるのだ。

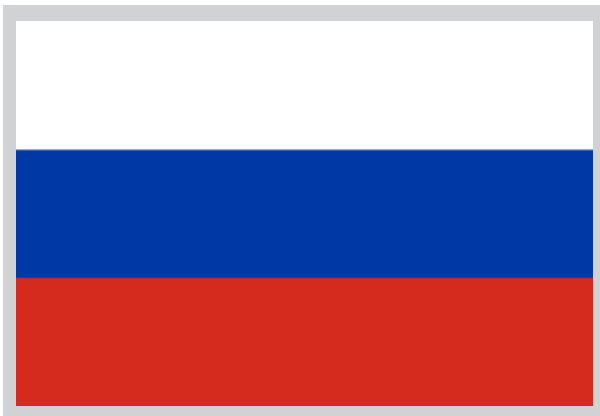
16階層のデッキから船客のみんながこの光景を見守っていた。「KGB」、「赤の広場」、「共産主義国」等の暗い、重い、寒いというマイナスイメージを払拭してくれることを期待していた。

やがて、ブラスバンドの重厚な曲が演奏された。一斉に拍手、そして……、お客様の一人が楽隊に向かって白い紙に包んだ明らかにお金と思われるものを投げた。すかさず「ストップ・イット！（止めろ！）」白人客の一人が叫んだ。あれほど前もって船内放送で「ロシアを侮辱するよいうなことをしないでように」と通達さ

れていたにも関わらず、世界各国から来た約3500人の船客全員には通じていなかった。



ロイヤルプリンセス号
（個人自由クルーズ専門サイト「BEST①クルーズ」より転載）



汎スラヴ色を使ったロシア国旗

一瞬の間、楽隊と16階層の船客たちの間には気まぐしい雰囲気があった。楽隊に動きが生じた。何事もなかったように、次の曲が吹奏された。そして一人の隊員が制帽の中に、投げられたお金を拾い入れ始めたのだ。これを機に投げそこなった船客が楽隊に向かって次々に投げ、それを一人の隊員が次々に拾って歩いた。

このようなことがあったので、のちに訪れたエルミタージュ博物館への大通りの道路が破損してくぼみがあったり、一階のガラスが破損したまま壁がくすんだ建物を見るにつけ、先ほどの楽隊員のお金を拾う姿

を思い浮かべてしまった。

昼食で立ち寄ったレストランでは、ロシアでは宝物級の「キャビア」を、幹部級のウェイターが、お客の求めに応じて食事中に持参。念のために辺りの様子をうかがって、新聞紙に包んだキャビアをテーブルの下で手渡し、素早くお金を受け取るのだ。これもちよつとしたスリルであった。でも、かの幹部級のウェイターは、政府の役人とは話が付いているのはと下種の勘繰りをしたものだ。

約1300人の乗組員の仕事は、フィリピン人がミュージックを、甲板磨き等油を使う仕事はパキスタン人（肌と甲板の色とが似ていた）、フロント、カメラマン、ビュッフェ等の担当は白人の女の子、食堂のアテンドはイタリアやポルトガル人の男性たちと国別に組み分けされていた。

観光で上陸した先では、船内ではフロントにいた女性が、カメラマンに早変わり。船に帰って来た時にはもう写真が飾ってあった。ちよつと前に体験して記憶に生々しく残っているの、なんとなく買入れたくなる。スピーディーでアングルも良く撮られているので、とてもよく売れていた。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

星祭り老いには老いの願ひごと

近藤 昌平

全速でうねり歩きの毛虫かな

富久光

風立ちて地に着くまでの竹落葉

片岡 正人

陶芸の部屋雑然と梅雨に入る

隆愚

瑠璃蜥蜴角の欠けたる忠魂碑

大槇 三代子

芸備線ふるさととは万緑の胎内なか

赤川 冬人

梅の実はほんのり紅の化粧して

松岡 初枝

吾が手の中で笑みくるるごと

投稿&寄稿

候のことば

「和風月名」

隆愚

「和風月名」の一口メモシリーズの最終回です。

◎八月葉月（はづき）…旧暦では秋にあたるため、「葉落ち月」の略だ

といわれます。
◎九月長月（ながつき）…だんだんと夜が長くなることから、「夜長月」が変化して「長月」になったようです。

◎十月神無月（かんなづき）…全国の神々が出雲大社に集まり、各地の神々がいなくなる月であることから「神無月」になったといわれます。

新酒を醸し出す月という意味の「醸成（かみなし）月」が転じたという説もあります。

◎十一月霜月（しもつき）…文字通り、霜が降りる月。

◎十二月師走（しわす）…法師が走り回るからという説がよく知られていますが、「師走」は後世の当て字で、「為果（しは）つ」「年果つ」が変化したという説が有力です。

「万緑のトンネル」

赤川 仁洋

先月号の芸備線ストロールの取材で、小奴可駅から国道314号線を歩いて登り、道後山駅を目指した。道後山駅が近づくと、道路が枝分かれしている所がある。斜め前方の細い道が県道444号線、湯川八川往還道で、その道を進めば道後山駅に到着する、はずである。

ネット上の地図では確認していたものの、初めて歩く道だった。国道が広くて見通しが良かったので、木々が生い茂る中の小道は、山の中に分け入った感が強くなる。

しばらく進むと、短い陸橋に出る。鉄柵の欄干から下を覗くと、鉄道が

敷設されている。ああ、この中を走ったのだと、列車に乗っていたときの窓の外の光景を思い出した。谷間を走っているようだが、おそらく山を掘削して鉄道を通したのではないだろうか。両側から木々が枝葉を伸ばし、掘削した斜面にはシダや灌木が生い茂り、二本のレールの中にまで下草が生えている。

万緑のトンネルだ！ 思わず心の中で叫んでいた。写真を見る度に、そのときの感動が甦る。自分の足でたどり着いた一枚である。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。

掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

九日市・夏休み折り紙教室開催

いろいろな種類の折り紙を体験してみませんか?

参加費は無料です。

開催日：8月9日(火) 10時~12時

会場：楽笑座(予定)

九日市「リサイクル市」

出店者募集中!

10月9日(日)の九日市において、
フリマ形式のリサイクル市を開催する予定です。

出店料は無料です!

申込先：九日市愛好会事務局 (☎0824-72-8285)

第27回新月マルシェ—文月夕涼み—

【開催日時】7月29日(金) 17:00~20:00 予定

【会場】庄原市口和町大月フリースタイル House 和げん
(備北交通上大月バス車庫前)

【主催】口和「新月マルシェ」の会 (0824-87-2754)

【後援】口和自治振興区、庄原市社会福祉協議会

広島県北「オーガニックマルシェ」

自然で安全なオーガニック食材にこだわった食品
の「市場」です。

【開催日時】7月10日(日)、8月21日(日)、
9月11日(日) 10:00~13:00

【会場】「敷信村農吉」野菜集荷倉庫
(庄原市板橋町 1358-1)

【主催】「オーガニック PGS ひろしま」
(090-7596-8295、檀上)

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

編集後記

◇今月は音谷さんの連載がお休みなので12ページになります。毎月、発行日前はバタバタしているのですが、ようやくコロナ禍も下火になったので、発行後はちよつと遠出をしてみるかと、あれこれ計画を立てながら頑張っています。◇梅雨寒もなくいきなりの猛暑で体調を崩す人が増えていきます。商店街から店が消えて、さらに病気や高齢で人も消えてゆく。過疎地の現実です。◇ロシアの国旗の三色、白はベラルーシ人、青はウクライナ人、赤はロシア人を表しているそうです。それだけ、ウクライナに対する思い入れは強いのでしょうか。でも、拒絶されたからといって略奪は許されません。

第 250 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 4 年 7 月 9 日 (土) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間(440年前)に物々交換で始まった市(いち)

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

7月8日(金)~7月10日(日) 10:00~15:00

草木染とパッチワーク二人展

★どら書房→休憩所あります!!

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座「まかない食堂」中止

「うた声喫茶」 開催 13:30~15:00

★きくや→総菜とお寿司の店頭サービス!!

★風龍→九日市スペシャルで餃子200円!

★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き

九日市特製ピタサンド600円

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

出店配置図



出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円~ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

